東日本大震災の災害支援看護活動を行って

著者	西村 聖子
雑誌名	三重看護学誌
巻	14
号	1
ページ	129-130
発行年	2012-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10076/11940

東日本大震災の災害支援看護活動を行って

西　村　聖　子

はじめに

私は東日本大震災で日本看護協会災害支援ナースとして二度の支援活動を行った．活動期間は 3 月 26 日〜4 月 1 日と 4 月 23 日〜4 月 27 日で，活動場所は宮城県内の被災地であった．日本中がこれまでに経験したことがないといわれる震災被害の中，自分自身も初めての支援活動であったが，看護師として活動し，感じたこと・学んだことを報告する．

宮城県での災害支援看護活動

日本看護協会の災害支援ナースは，宮城県に多数ある避難所の中でもライフラインの復旧が遅れている所や，要支援者が多い所へ派遣されていた．私も災害支援ナースとして派遣されたが，現地コーディネーターの役割を担当したため，宮城県看護協会内の現地対策本部を拠点に活動した．一度目の派遣では，宮城県の気仙沼市・南三陸町・女川町・石巻市の支援ナースの派遣先である避難所を回り現状を情報収集した．そして，派遣先への人員配置，災害支援ナースに対する各種コンサルテーション，物資管理と調達及び被災地への配布，その他各種連絡調整を行った．

私が現地入りしたのは，発災後二週間が経過したところであったが，避難所の中には全くライフラインが復旧していないどころか給水車も来ることができていないところが多くあった．避難所となっている学校の教室や体育館での避難生活は，被災者がひしめき，個人のプライバシーは全く確保できていなかった．被災者は，入浴や洗面ができないだけでなく，含嗽や歯磨きなど，水を必要とするすべてのことができず，食事も一日二食の状態であった．また，トイレは学校のプールに津波で溜まった水をくみ上げて使用していたが，詰まってしまうことから流すことができないでいた．さらに，避難所周辺または避難所そのものが被害を受けていたため，学校の一階や，晴れでも汚泥が乾燥しないグラウンドには瓦礫や流された車両があり，屋外での活動は制限され，周囲の風景も絶望的な状態になっていた．第一印象は，このような劣悪な環境の中，二週間もの間耐え忍んできた被災者を思うと言葉につまり，これまで自分は災害看護について学んできたが，どのような姿勢で活動すればよいのか一瞬戸惑った．また，自分たちのマイクロバスが避難所に入っているにも関わらず，水や食料が行き届いていないことや，ライフラインが確保された避難所ではなく，ライフラインの復旧の目処が立たない避難所で大勢の被災者が避難生活をしていることがどうしてなのか疑問であった．しかし，日を重ねる毎に，あまりにも大きすぎる被害にどこも対応しきれていないのだということが理解できた．そのため，自分たちの活動も災害看護で学んだとおり，自分自身で考えて行動すること，創意工夫することが必要となった．現地で活動する支援ナースが，被災者の生活環境整備や健康管理について自立支援を行い，その中から様々な問題点や現地のニーズを現地対策本部へあげ，私たちコーディネーターはそれらをとりまとめ，災害対策本部や代表者へ報告していった．

二度目の派遣は発災後一ヶ月以上が経過していた．主要道路の信号機は点灯し，学校が始業したため避難所はやや縮小，グラウンドの汚泥は除去され，子ども達が屋外活動していた．明らかに復興していると感じられる反面，膨大な量の瓦礫は必要な場所からとりあえず除去されているだけで，一歩側道に入ると前回の風景がそのままの状態であった．また，長期の避難所生活に耐えかね，ライフラインが途絶えた半壊の家屋に危険を承知で人が住んでいると思われる住宅が多くみられ，市でも把握しきれないと言われていた．このような中，私の活動は一度目と同様の役割もあったが，被災地から少し離れた土地に新たな福祉避難所が設置されるに伴い，コーディネーターとしてその開設にむけ関わっていくことであった．石巻市の各避難所を地元の保健師とともに回り，福祉避難所の対象者である要介護者を把握した．その後，新たな福祉避難所となるトレーニングセンターに入り，そこで要介護状態の

三重大学大学院医学系研究科修士課程　看護学専攻　クリティカルケア看護学科

被災者が生活できるよう，電気工事・トイレ業者・各種ボランティア・市役所担当者など，様々な事業者と連絡・調整をし，同時に現地入りした支援ナースとともに，大きな体育館を居住空間へと整備した．ここでもやはり，見知らぬ土地で限りある資源を活用し，どのようにすれば期日に利用者を迎え入れることができるか，一時的な支援者である自分たちではなく，地元の人達が避難所を運営していけるためにはどうするのかよいか，自分で考えていく必要があった．

私の活動期間は，福祉避難所へ利用者が入所する前日までであったため，作り上げてきた福祉避難所での生活を見届けることはできなかった．しかし，後続の支援ナースからの連絡で無事に利用者が入所し，安全な避難生活を送れているとの連絡を受けた．

また，7月には石巻市の保健師の方から避難所の運営が上手くいっていること等の手紙をいただき，自分の活動が繋がり，現在に至っていると感じることができた．

おわりに

被災地は本当に何もかもを失くしてしまった状態で，共に活動した被災者でもある現地の医療者は，一ヶ月を過ぎてもまだ家族の弔いもできていないと話していた．そのような中での支援活動は，漠然としたことを誰かに相談できるような状況ではなく，主体性を持って行動しなければならないということを痛感した．また，想定外の甚大な被害ではあるが，人々の結集により，それを乗り越えようとする人の力の強さを感じ，そのような中であるからこそ，私も無事に支援活動を終えることができた．

最後に，犠牲になられた方々のご冥福をお祈りし，被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます．

マイクロバス内から志津川町

トレーニングセンター体育館
（居住空間作成中）